

日本の英語教育における盲点：音声教育の現状と課題

著者名(日)	太田 かおり
雑誌名	九州国際大学国際関係学論集
巻	8
号	1/2
ページ	37-69
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000281/

日本の英語教育における盲点

—音声教育の現状と課題—

太 田 かおり

はじめに

英語は、国際共通語としての地球規模的普及を背景に common language, international language, World Englishes, Lingua Franca, global language 等、多くの研究者や人々によって様々に呼称されてきた。その変遷を辿るだけでも、英語という言葉が国際社会においてどのように位置付けられ、どのように使用領域を拡大してきたかを垣間見ることができる。英語の国際化に伴って、英語の発音観も同様に変化してきた。

英語が国際共通語として位置付けられる以前、学習指導要領における英語の音声は「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音 (2-2-(1)-ア-(ア), 1958: 215)」と明記されており、発音の正確さを求めると同時にネイティブに近い発音が理想とされてきた。「現代の標準的な発音 (2-2-(2)-ア-(ア), 1977: 102)」と表記されるようになったのは 1977 年改訂版学習指導要領からであり、現行の学習指導要領 (平成 20 年改訂版) においても同様の表記が踏襲されている。しかし、「現代の標準的な発音」とは一体どのような発音であるのか、については具体的に言及されておらず、曖昧さと抽象さが否めない表現となっている。音声に関する具体的な指導内容について、中学校学習指導要領 (外国語編 平成 20 年改訂版, 2008: 70) は、1) 「現代の標準的な発音」、2) 「語と語の連結による音変化」、3) 「語、句、文における基本的な強勢」、4) 「文

における基本的なイントネーション」、5)「文における基本的な区切り」の5項目を指導することと表記しており、高等学校学習指導要領(外国語編 平成21年改訂版)においても同様の項目を適宜指導することとなっている。では、このように学習指導要領にも明記されている英語の音声教育に関して、中学校や高等学校の現状においては、どのような指導が行われているのであろうか。

「昔はきれいな発音と言っていたが、そんなのはもう無意味で時代遅れ。なぜかという、英語が国際共通語となった今、我々が英語を話す相手は英米以外の、非母語話者であることが多いから。お互い下手な英語で話し合うんだけれども、分からなかったら困る。ごく普通の英語を、ゆっくり、はっきりと、相手にわかるように話すことが大切だ。(『読売新聞』2012年6月23日 朝刊「教育ルネサンス」, 鳥飼玖美子 談)

一見すると、発音指導などもはや行う必要がないのではないかという誤解を招きかねない表現であるが、同談において鳥飼は「英語でコミュニケーションするには、語彙や発音、文法も含めた言語の知識が必要」と述べており、国際共通語としての英語コミュニケーションには発音等に関する一定の知識を持ち合わせている必要があるとしている。すなわち、ネイティブのような発音ではなくとも、国際共通語として通じる「わかりやすい英語」を話すことが重要であるとの立場を示している。また、見上他(2011)は、「国際的に通用する英語を発音する必要がある(p.205)」と述べ、国際共通語としての英語には発音の通用性が一定水準求められる必要があることについて言及している。

このように、英語の地球規模的運用に伴い国際共通語としての英語を巡る発音観は「ネイティブのような発音の正確さ」から、「流暢さ」と「適切さ」を重視する傾向へと変わり、さらには、話者間で理解し合える「わかりやすさ」が求められる時代へと移り変わってきたことがわかる。

ここで、国際的に通用し得る英語の音声指導を教育課程のどの段階で、いつ、

誰が、どのように行うべきであるかについて論じることとする。この議論を行うにあたって、先ずもって留意しておかなければならないことは、「国際共通語として実際の運用場面における英語音声」に関する議論と、「学校教育課程における外国語としての指導面における英語音声」の議論とを単純に一纏めにして混同してはならない、ということである。すなわち、英語の「いろは」を教える段階にあたる学校教育場面において、Lingua Franca 的発想を隠れ蓑にして「ネイティブの発音でなくていいから、とにかく自由に喋りなさい」と言うのは主客転倒であり、教育者として責任放棄に等しい。十分な音声指導を行わずして「我流・自己流の発音」を英語教育の早い段階から安易に推奨することは、決して良策とは言えない。筆者は、現在の教育制度では中学初年次早期段階の英語教育において、英語担当者が責任をもって音声に関する一定の知識と運用両面に関わる指導を行うべきであると考えている。しかし、今後は、小学校外国語活動の導入に伴い、小学校教員がその指導を行わざるを得なくなる蓋然性も高く、指導者養成や指導技術向上のための研修制度の充実、ならびに音声指導用教材の研究開発が求められる。留意すべき点は、小学校と中学初年次の英語教育の狭間に音声教育が埋もれてしまうといった落とし穴現象が決して生じないように、確固たる教育理念に基づいて音声教育が施され、指導計画および対策についても十分に講じられなければならない、ということである。

日本人が英語の発音を苦手とする要因について、太田（2012）は「日本の英語教育において、音声指導が充分に行われていない実態に大きな問題がある（p.69）」と考えており、中学校・高等学校において英語の音声指導が充分に行われていない現状を、学校教育の実態調査結果に基づいて報告している。太田（2012）によると、英語学習者の87.9%が中学校において、84.8%が高等学校において英語の音声や音声規則に関する指導を「受けていない」と回答しており、81.8%が「音の規則についてもう少し早く学習しておきたかった」、81.8%が「英語の発音には自信がない」、90.9%が「英語の会話力に自信がない」と回答したことが報告されている（p.57-63）。このように、中学校・高

等学校における英語音声教育の現状は極めて深刻であり、日本の英語教育が抱える盲点の一つであると言える。

以上のような議論を背景に、本稿は、次の二つについて考察することを目的とする。第一に、学校教育における英語の音声指導を中心に論じ、「音声」をめぐる諸問題について検討する。第二に、大学生を対象に実施したアンケート調査⁽¹⁾の結果をもとに、日本の英語教育における音声指導の詳細を明らかにし、現状と課題について考察する。これにより、音声教育が看過されていると思われる中学校・高等学校における英語教育の現状に一石を投じることとした。

1 小学校外国語活動における音声教育をめぐる懸念

英語の「音声」に関する指導は、日常的な英語教育の中で持続的かつ継続的に行われることが望ましいが、とりわけ英語学習の初期段階における音声教育の在り方は、学習者が音声認識に敏感な時期⁽²⁾であることから極めて重要であり、適切な指導を行うことが特に求められる。2011年度より小学校外国語活動が開始されたことに伴い、この役割を小学校が担いつつあることも確かである。しかし、以下のように課題もまた多い。

全国の小学校5・6年生を対象に外国語活動の時間が必修化され、すでに導入に至ってから3年目を迎えようとしている。英語教育の国際的傾向としては、小学校の早い段階から英語教育を導入する傾向が優勢である中（大谷，2009）、日本の小学校外国語活動導入については、とりわけ「音声教育」の観点から懸念要素を抱えている。小学校外国語活動では、「音声言語を中心とした活動を行うことが求められていることから、これが実質的な英語音声教育のイントロダクションにあたることは間違いない（太田，2012：66）」が、外国語活動の指導者養成や指導技術向上については十分な対策が講じられていないため、現場の対応に著しい立ち遅れが見られる。

小学校への外国語教育導入については、メリットもある一方で課題も多い。これまで、ほとんど英語を教えたことのない、あるいは教える技術を学んだことのない多くの小学校教員が、必修化に伴い週1時間の英語を指導せざるを得なくなった現実は軽視できない。教育現場の指導者もさることながら、最も直接的な影響を受けるのは小学校の児童たちである。教員免許状を持たなくても英語に堪能な地域の人々がいたら教壇に立たせようという国家の方針に対して、大谷（2009）は「医師国家試験に合格しなくても、そして臨床研修の経験をしなくても、地域に医学好きの人間がいれば、その人に病人の治療を任せようとする無責任さに似ている（p.36）」と厳しく批判している。

大津・鳥飼（2009）が指摘するように、「小学校段階でゆがめられた英語の知識や技能が身に付いた場合、それを中学校段階以降に捨て去り（unlearn）、新たに正しい知識や技能を身に付けるのは至難の業である（p.26）」。

早期英語学習と発音習得の関連性について、大津（2007）は年少の頃から優れた指導者のもとで英語学習を始めると、「発音に対して敏感な時期なので、その頃に付けた発音は定着しやすいという傾向があるのは事実（p.87）」と述べると同時に、「一度悪い癖をつけてしまうと、それを取り去ることはなかなか大変だということもまた事実（p.87）」と続けている。また、ある中学校で実施した入学当初のアンケート調査の結果について金森（2012）は、「90%近い生徒が英語への嫌悪感や苦手意識を持っていたことがわかった（p.10）」と報告しており、2011年から全国の小学校5・6年生で実施の運びとなった外国語活動を通じて、すでに多くの児童が英語学習への苦手意識を持ってしまう現状を問題点として指摘している。さらに、小学校と中学校の教員間で意見交換を行った内容について、小学校段階で「アルファベットを指導してほしい」、「発音の指導をしてほしい」等の意見が中学校英語教員側から多く寄せられたことや（金森，2012：11）、小学校外国語活動における教員の指導力不足を懸念して、「外国語活動を指導する高学年の担任を渡る教員が出ている（p.10）」という現状についても報告している。これらのことから、学齢期の

児童を持つ親の60%以上が小学校での英語教育を望んでいるという文部科学省の調査報告(大津, 2006)に反して、現場で教える小学校の教員も教わる側の児童も、外国語活動の導入には少なからず不安や戸惑いを隠せないでいることが見て取れる。

2 学校教育における英語音声指導の重要性

英語教育を論じる上で、学習者がどのような環境下において英語を学習しようとしているのか、言葉を身に付ける環境や形態の違いを認識しておくことは極めて重要である。「母語」、「第二言語」、「外国語」の三つの言語環境の区別については、外国語教育やSLA研究の分野においては基本概念の一つであるが、日本の英語教育を論じる本稿においては核となる視点でもあるため、敢えて今一度ここで触れておきたい。

「母語」、「第二言語」、「外国語」という三つの言語環境について大津(2007)は、これら三つの用語を混同してはならないとした上で、次のように説明している。「母語」は第一言語と呼ばれることもあり、人間が生まれて一定期間その言語に触れていることによって、自然にしかも無意識的に身に付いた最初の言語である、としている。一方、「第二言語」は、生まれた時期とその言語に触れ始めた時期にずれがあるものの、外国語環境ではなく母語環境で母語以外の言語を身に付けた言語で、獲得や運用は概ね無意識的であり、獲得に成功する可能性が高い。また、その言語を身に付けることが生活維持に不可欠である場合が一般的である、としている。さらに、「外国語」については、母語を身に付けた後、学校や文法書などで意識的に学ぶ言語である(大津, 2007: 14-30)、と説明しており、日本の公教育における英語教育が外国語環境における外国語学習であることを明示している。

換言すれば、日本に生まれ、日本語環境において日本語を母語として日常的に使用しつつ、日本の小学校や中学校、高等学校において英語を「教室」とい

う形式的かつ限定的な空間において意識的に学ぶ学習者にとって、英語は外国語の位置付けとなる。外国語として英語を学ぶ学習者に対しては、英語の音声教育は、運用に至るまでの前提条件として意識的に行われ、発音方法や音声形態が知識として習得されておく必要があるというのが筆者の第一の主張である。もちろん、英語が国際的な共通語であるという認識は、指導者も学習者も持つておく必要がある。しかし、ここで重要となる議論は、国際共通語としての英語の音声教育を、学校教育という外国語学習環境下においてどのように行っていくことが望ましいのか、ということである。

日本の初等・中等教育における英語教育が、「外国語」としての学習環境であって「第二言語」としての言語環境ではない以上、「気がついたら習得していた」という無意識的言語習得の可能性は極めて低く、ある程度意識的かつ体系的に知識としての言語材料を教授する過程が学習段階において不可欠であり、更にその上で、学習した言語材料を実際に運用する言語活動が両輪として求められる。現在の日本の公立中学校における「週4時間」という限られた学習時間の中で、可能な限り外国語としての英語学習の成果を上げるためには、言語材料の一つである「音声」の指導も、語彙や文法の指導と同様に行われるべきであり、まずは英語の音声や音韻規則に関する知識を意識的に学習した上で、「聞き分ける」、「話してみる」などの実際の言語運用も同時に図ることが欠かせないと言える。わずか週4時間という決して充分ではない英語学習時間の中で、「いずれ自然と発音できるようになるだろう」と考えることはあまりにも楽観的であり現実的とは言えない。先述のとおり、一度身に付いた発音を変えることは容易ではないため、英語学習初期段階において可能な限り音声指導の時間を確保し、英語の音声認識力を高めておくことが肝要である。

では、外国語としての英語教育を少なくとも6年間受けた現役大学生は、中学校・高等学校においてどのような英語音声指導を受けてきたのであろうか。本稿では、太田（2012）にて筆者が行った質問紙調査と一部同様の質問項目について新たに別の母集団に対して調査を実施した。これにより、結果の

信頼性を検証するとともに、新たな細目を追加して調査を行うことによって、音声指導の現状に関する、更に詳細な考察を試ることとする。

3 調査

3-1. 調査の目的

中学校および高等学校において6年間の英語学習を終えた大学生を対象に、「中学校・高等学校の英語授業における音声指導に関するアンケート調査」を実施し、日本の中学校・高等学校における英語音声指導の詳細について明らかにすることを目的とする。

本稿で分析を行う質問項目は、次の4項目（全18問）である。質問項目1・2については、太田（2012）と同様の質問項目につき、新たな別の母集団に対して調査を実施した。前回と今回の調査結果を比較することによって、結果の信頼性の検証を行い、傾向の同異を見ることを目的の一つとする。同様の調査結果が得られた場合には、今後更に母集団を増やしつつ累積調査を行い、一般的な傾向を掌握することを試みる。

質問項目3・4は、今回新たに調査を行った新規の質問項目である。質問項目3は、中学校・高等学校の英語授業における音声教育の具体的な指導内容について、より詳細な調査を行う。これにより、中学校・高等学校においてどのような発音指導や音声教育が行われ、音声のどの側面に特に焦点をあてた指導がなされてきたのか、或いはなされていないのか、について明らかにすることを目指す。

質問項目4は、heart(心)とheard(聞く hear の過去形)の下線部の発音について五つの質問を行い、学習者が音声の違いを区別して認識できているのか否か、について調査を行った。

最後に、英語の音声や音韻規則について学んだ学習者の感想をもとに、音声教育を通じての気づきについて、1) これまでの音声教育の振り返りと音声教

育の開始時期、2) 音声教育の重要性、3) IPA・発音記号の有用性、4) 音声への「気づき」と「自信」の4項目に分類し、それぞれについて考察を行う。

3-2. 調査方法

調査対象者

筆者が所属する大学において「英語音声学（※授業担当者は筆者）」を受講している学生43名（男子26名、女子17名）を対象⁽³⁾とする。当該科目は選択科目の一つであり、2年次以上の学部生であれば希望者は選択可能となっている。科目履修に関する特別な履修条件は設けていないため、調査対象者は本学における平均的な大学生であり、母集団の英語力や英語学習動機に極端な偏りはないものと考えられる。

実施期間

授業実施期間：2012年9月末～2013年1月末迄（90分×15回講義）

質問紙調査時期：2013年1月下旬～2013年2月上旬

調査内容⁽⁴⁾

中学校・高等学校の英語授業における音声指導の実態に関する調査を、質問紙により実施した。本稿にて考察を行う質問項目は、以下の4項目（全18問）である。質問項目1と2は太田（2012）と同様の質問項目について調査し、質問項目3と4は今回の研究で新規に質問項目を設定し調査を行った。

質問項目1. 中学校で発音指導をどのくらい受けましたか？

質問項目2. 高校で発音指導をどのくらい受けましたか？

質問項目3. 中学校および高等学校の英語授業における音声指導に関する調査⁽⁵⁾

1) 子音の発音方法に関する指導について

- 2) 母音の発音方法に関する指導について
- 3) 綴りと発音の関係に関する指導について
- 4) アクセントに関する指導について
- 5) イントネーションに関する指導について
- 6) 音の連結・連音に関する指導について
- 7) 音の同化に関する指導について
- 8) 音の脱落に関する指導について
- 9) 英語の音のリズムに関する指導について
- 10) 日本語と英語の発音の違いに関する指導について
- 11) 日本語と英語のリズムの違いに関する指導について

質問項目 4. heart(心)とheard(聞く hear の過去形)の発音に関する調査

- 1) heartとheardの下線部の音の区別があることについて
- 2) heartとheardの下線部の音の違いを聞いて区別することについて
- 3) heartとheardの下線部の音の違いを区別して発音することについて
- 4) heartとheardの下線部の音の違いを聞いて区別することの必要性について
- 5) heartとheardの下線部の音の違いを区別して発音する必要性について

4 結果

質問紙調査による4項目(全18問)の質問に対する回答結果を、以下の表1～表4に示した。表1は中学校の英語授業において発音指導をどの程度受けたかについて、表2は高等学校の英語授業において発音指導をどの程度受けたかについて、表3は中学校および高等学校の英語授業における具体的な音声指導内容の詳細(子音、母音、綴りと発音の関係、アクセント、イントネー

ション、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声やリズムの違い）について、表4はheart(心)とheard(聞く hear の過去形)の発音の区別について、それぞれ調査を行った結果を示している。

表1 中学校で発音指導をどのくらい受けましたか？ (n=43)

	人数(人)	割合(%)	
全く受けていない	14	32.6	
ほとんど受けていない	26	60.5	93.0
少し受けた	2	4.7	
かなり受けた	1	2.3	
TOTAL	43	100	

表1は、中学校の英語授業で発音指導をどの程度受けたかについて質問した結果である。93.0%が「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答しており、9割を超える学習者が中学校の英語授業において発音指導を受けていないと回答した。「少し受けた」または「かなり受けた」と回答したのは全体のわずか7.0%と極めて低かった。質問項目1と質問項目2に関しては、筆者は2010年度にも同様の質問紙調査を実施しており、結果を太田(2012)にて報告している。太田(2012)によると、全体の87.9%が中学校で発音指導を「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答しており、今回と同様に高い割合の学習者が、中学校の英語授業において十分な発音指導を受けなかった、と認識している現状が明らかとなった。今回の調査では、更にその結果を上回る高い割合(93.0%)が中学校で十分な発音指導を受けなかったと回答した。

表2 高校で発音指導をどのくらい受けましたか？ (n=43)

	人数(人)	割合(%)	
全く受けていない	16	37.2	
ほとんど受けていない	24	55.8	93.0
少し受けた	3	7.0	
かなり受けた	0	0	
TOTAL	43	100	

表2は、高等学校の英語授業で発音指導をどの程度受けたかについて質問した結果である。中学校と同様に93.0%が「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答した。「少し受けた」と回答したのは全体のわずか7.0%に止まっており、「かなり受けた」と回答した学習者はいなかった。同様の質問項目について調査を行った太田(2012)では、全体の84.8%が高等学校の英語授業において十分な発音指導を受けなかったと報告しており、今回は更にそれを上回る93.0%の学習者が、高等学校の英語授業において十分な発音指導を受けなかったと回答した。表1と表2の結果から、日本の中学校・高等学校における英語の音声や発音に関する指導は、極めて貧弱であるという深刻な実態が浮き彫りとなった。

表3 中学校および高等学校の英語授業における具体的な音声指導内容(子音、母音、綴りと発音の関係、アクセント、イントネーション、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声やリズムの違い)について

(n=43)

	全く受けていない		ほとんど受けていない		全く受けていない (ほとんど受けていない)		少し受けた		かなり受けた		少し受けた +かなり受けた	
	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
子音の発音方法に関する指導を	16	37.2	20	46.5	36	83.7	7	16.3	0	0	7	16.3
母音の発音方法に関する指導を	14	32.6	18	41.9	32	74.4	11	25.6	0	0	11	25.6
綴りと発音の関係に関する指導を	16	37.2	17	39.5	33	76.7	9	20.9	1	2.3	10	23.3
アクセントに関する指導を	6	14.0	12	27.9	18	41.9	21	48.8	4	9.3	25	58.1
イントネーションに関する指導を	6	14.0	14	32.6	20	46.5	21	48.8	2	4.7	23	53.5
音の連結・連音に関する指導を	13	30.2	17	39.5	30	69.8	12	27.9	1	2.3	13	30.2
音の同化に関する指導を	20	46.5	14	32.6	34	79.1	8	18.6	1	2.3	9	20.9
音の脱落に関する指導を	20	46.5	16	37.2	36	83.7	6	14.0	1	2.3	7	16.3
英語の音のリズムに関する指導を	17	39.5	12	27.9	29	67.4	13	30.2	1	2.3	14	32.6
日本語と英語の発音の違いに関する指導を	19	44.2	14	32.6	33	76.7	9	20.9	1	2.3	10	23.3
日本語と英語のリズムの違いに関する指導を	20	46.5	14	32.6	34	79.1	9	20.9	0	0	9	20.9

表3は、中学校および高等学校の英語授業における音声指導の詳細を明らかにする目的で、音声に関する具体的な指導内容について質問紙調査を行った結果を示している。質問項目は「子音、母音、綴りと発音の関係、アクセント、イントネーション、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声やリズムの違い」に関する11項目である。

子音の発音方法に関する指導については、83.7%が「全く受けていない」ま

たは「ほとんど受けていない」と回答した。また、母音の発音方法に関する指導については74.4%、綴りと発音の関係に関する指導については76.7%、音の連結・連音に関する指導については69.8%、音の同化に関する指導については79.1%、音の脱落に関する指導については83.7%、英語の音のリズムに関する指導については67.4%、日本語と英語の発音の違いに関する指導については76.7%、日本語と英語のリズムの違いに関する指導については79.1%が「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答しており、いずれも高い割合である。

特に、子音の発音方法に関する指導と音の脱落に関する指導については、83.7%が「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答しており、最も高い割合となった。続いて、音の同化に関する指導や日本語と英語のリズムの違いに関する指導については79.1%が「全く受けていない」または「ほとんど受けていない」と回答しており、音の脱落や同化といった英語特有の音変化に関する指導やリズムに関する指導が特に手薄になっている実態が明らかとなった。

また、日本語と英語の発音の違いに関する指導については76.7%が充分でないと回答し、日本語と英語のリズムの違いに関する指導については79.1%の高い割合が充分でないと回答していることから、日本語と英語の発音やリズムの違いを比較しながら指導を行う音声指導は極めて少ない現状が見て取れる。そもそも、日本語や英語が話せることと、その言語の音声規則や文法規則を知っており説明できることは別の問題であり、指導者が音声指導を行う場合は両言語の音声的特徴やその相異に関する基本知識をあらかじめ持ち合わせていることが不可欠である。その上で、学習者への指導にも反映させることが初めて可能となり得るのである。

さらに、綴りと発音の関係に関する指導についても76.7%が中学校や高等学校の英語授業において十分な指導が行われなかったと回答している。英語は、音声と綴り字が必ずしも一致していないため、音声と綴りとの関係性につ

いては一定の知識として学んでおく必要がある。例えば、英単語の綴りを日本語のローマ字読みや語呂合わせで覚えてしまうと、リスニングやスピーキング等の実際の使用場面において役に立たないことが多く、非効率的で実用的でない。したがって、英語の「発音」、「アクセント」、「綴り」、「意味」、「概念」は全てを一体として学ぶことが重要であるが、このような指導が中学校や高等学校の英語授業においては学習者が理解するにまでは至っていないことが明らかとなった。

一方、質問項目3に関連する全11項目のうち、過半数を超える割合の学生が「少し受けた」または「かなり受けた」と回答している項目は、次の二つである。半数を若干超える割合ではあるが、アクセントに関する指導については58.1%、イントネーションに関する指導については53.5%が「少し受けた」または「かなり受けた」と回答した。この結果について考えられる理由の一つは、発音と並んでアクセントやイントネーションが重要であることは勿論のこと、すでに述べたとおり、学習指導要領（外国語編）において「アクセント」と「イントネーション」の指導が歴史的に言及されてきた、という教育上の影響があることも考えられる。

質問項目3については、音声指導に関する11項目の質問中9項目（「子音、母音、綴りと発音の関係、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声の違い、日本語と英語のリズムの違い」）において調査対象者全体の67.4%～83.7%が「指導が充分に行われていない」と回答している一方で、過半数をわずかに超えたのは「アクセント」と「イントネーション」に関する2項目であった。

換言すれば、日本の英語教育において、アクセントやイントネーションに関する指導は比較的行われていることが窺えるが、その割合は6割未満であり決して充分とはいえない。また、今回の調査では、その他の項目については指導が極めて行き届いていないことが明白となった。英語の音声指導については、1) 子音や母音の音声や調音方法、2) 綴りと発音の関係性、3) 語や文の

アクセント、4) イントネーション、5) 連結・連音、同化、脱落等による音変化、6) リズム指導など、単音からプロソディーに至るまでの音声指導が調和的に行われることが最も望ましく、小さな音声単位だけでなく、句や文における超音節的側面に関する音声指導も同時に行われなければならない。学校教育における音声指導では、実質的なコミュニケーションにおいても実用可能な調和的・総括的な音声教育を行い、音声に関する一部の側面のみに極端に偏った指導が行われることのないよう配慮が必要である。しかし、今回の調査結果により、音声に関するさまざまな側面を総合的に指導するような音声教育には、残念ながら多くの現場が至っていないことが明らかとなった。

表 4 heart (心) と heard (聞く hear の過去形) の発音について

(n=43)

	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
<u>heart</u> と <u>heard</u> の下線部には音の区別があることを	知っていた		知らなかった	
	12	27.9	31	72.1
<u>heart</u> と <u>heard</u> の下線部の音の違いを	聞いて区別できた		聞いて区別できなかった	
	22	51.2	21	48.8
<u>heart</u> と <u>heard</u> の下線部の音の違いを	区別して発音できた		区別して発音できなかった	
	14	32.6	29	67.4
<u>heart</u> と <u>heard</u> の下線部の音の違いを聞いて区別することが	必要だと思っていた		必要だと思っていなかった	
	24	55.8	19	44.2
<u>heart</u> と <u>heard</u> の下線部の音の違いを区別して発音できることが	必要だと思っていた		必要だと思っていなかった	
	24	55.8	19	44.2

表 4 は、heart[há:rt](心) と heard[há:rd](聞く hear の過去形) の発音について、「英語音声学」の講義を受ける以前はどうであったかについて調査を行った結果である。

heart と heard の下線部の母音の音が異なることを「知っていた」と回答した者が 27.9%、「知らなかった」と回答した者が 72.1%であった。驚くことに、全体の 7 割を超える学生が heart と heard の下線部に音の区別があることを知らなかったことが明らかとなった。次に、音の違いを「聞いて区別できた」と回答した者が 51.2%、「聞いて区別できなかった」と回答した者が 48.8%であり、「区別して発音できた」と回答した者は 32.6%、「区別して発音できなかった」と回答した者は 67.4%であった。ここまでの結果により、聴覚に

よる区別よりも、実際に区別して発音することの方が難しいと感じている学習者が多いことがわかる。また、heart と heard の下線部の音の違いを聞いて区別することが「必要だと思っていた」と回答した者は 55.8%、「必要だと思っていなかった」は 44.2%であり、さらに heart と heard の下線部の音の違いを区別して発音できることが「必要だと思っていた」は 55.8%、「必要だと思っていなかった」は 44.2%となっている。これは、heart と heard は下線部の母音の音が実際には異なっているにも関わらず、区別して聞き取ることや、区別して発音することが必要だと思っていなかった学習者が 44.2%もいたことを示す驚愕の結果となった。

学習者の中には、「heart と heard は今まで語末の "t" と "d" で区別していた」と記述している者もあり、これまで、heart と heard の音声の違いについては、語末の子音の違いで区別しており、下線部の母音による音の識別をしてこなかったという事実が明らかとなった。すなわち、この学習者にとって heart と heard はおそらく「ハート」と「ハード」であり、語末を除く「ハー」の部分は両語とも同じ音として認識されていたことになる。

日本語の母音の「あ」は基本的に一種類であるが、英語には /a/ (開前舌非円唇母音)、/ʌ/ (半開後舌非円唇母音)、/ə/ (中段中舌母音)、/æ/ (準開前舌非円唇母音)、/ɑ:/ (R 音性中段中舌母音) など複数存在する。英語は、これらの母音の違いにより単語の意味が異なるため、繊細な母音の違いもリスニングやスピーキングにおいて識別する能力が求められる。英語音声コミュニケーションにおいて音声に関する認識力や識別力が極めて重要であることに新たに気がついた学習者は多く、重要な学びの機会となったに違いない。一方で、これまでの英語教育の過程で、これらの必要性について学び、認識を深める機会に恵まれなかったという学習者たちが不憫に思えてならない。これは、学習者の意欲や能力、学習動機などについて論じる以前の問題として、指導者側が果たせなかった責任は大きく、学習者の上に重くのしかかっていると思われる。今後は、このような音声指導の実状を改善すべく、対策と取り組みの強化が急

がれる。

音声への「気づき」から「自信」へ（学習者の感想についての考察）

以下には、「英語音声学」を受講した学習者の感想や意見を、内容別に以下の4項目に分類し、それぞれについて考察を試みている。音声教育に関する学習者の率直な声を可能な限り拾い上げることが目的である。英語音声学を4ヶ月間（15週）に亘って学んだ学習者の意見や感想について「気づき」ごとに整理し、1) これまでの音声教育の振り返りと音声教育の開始時期、2) 音声教育の重要性、3) IPA・発音記号の有用性、4) 音声への「気づき」から「自信」へ、の4項目に関して考察を行った。

(1) これまでの音声教育の振り返りと音声教育の開始時期について

【これまでの音声教育の振り返り】

- ・ 中学・高校時代、英語の音声に関する指導を全く受けたことがなかった。今回この講義を受けて発音の仕方をきちんと学んだことで、これまで何となく発音していたアルファベットや英単語が自信を持って発音できるように変わったと思う。辞書に載っているIPAも自信を持って読むことができるし、似ている単語の音声も聴き分けることができるようになった。
- ・ 発音の仕方を学ぶ機会がなかったので、とても楽しく勉強できた。
- ・ 自分がいかに自己流の発音をしていたか、びっくりしている。
- ・ 今まで英語の音声を学ぶということが非常に少なかったので、発音の練習はあったとしても、なぜこの音なのか、どうやってこの音を出すのか、ということに注目していなかった。耳に入ってきた音だけで英語を何となく聞いていたが、微妙な違いを聴き分けることができない耳になっていた。
- ・ これまでの英語学習で発音の仕方を学習したことがなかったので、とても勉強になった。今後の英語学習に活かして行こうと思う。
- ・ 発音については今まで習ってこなかったために、いわゆる「カタカナ英語」

の読みしかできなかった。この講義を通して、「英語」をネイティブにもはつきり通じるような発音で話すといった意識が向上した。

- ・今まで触れることのできなかった英語の音声について学ぶことができ、大変勉強になった。
- ・今まで自分がしてきた発音方法が正しくなかったということに気づいた。

【音声教育の開始時期・早期音声教育の重要性】

- ・もっと早く学んでおきたかった。
- ・英語学習の早い段階で学習できたら良いと思う。
- ・この授業を受けて本当によかったと思う。同時に、なぜ今まで音声学に目を向けなかったのだろうと後悔もある。もう少し早く勉強していれば、現在違った英語の発音ができたのではないかなと感じている。
- ・音声学を学ぶ時期は、早ければ早いほど良いのではないかと思う。

これまでの英語学習において、音声教育を受ける機会が極めて少なかったことや、発音方法について学ぶ機会がなかったことが意見として多い。「似ている単語の音声を聞き分けることができるようになった」という意見に代表されるように、似ている音(例えば father[fá:ðər]、farther[fá:rðər]、further[fó:rðər])を区別して認識できている学生は少なく、そもそもこれらを全て同じ音、例えば「ファザー (またはファーザー)」という一つの発音、として認識している学生が想像を超えて多かった。ここで重要となるのは、英語は母音の数⁽⁶⁾が多いため、これらの母音 ([a:], [ɑ:r], [ə:r]) の違いを区別して認識する必要があり、これら全てを「異なる音」として識別する力が必要であるが、このような音声識別力の重要性について「初めて知った」という学習者が極めて多かった点である。このような音声の違いについて学ぶ機会を逸してきたがゆえに、「微妙な違いを聴き分けることができない耳になっていた」という意見にも頷ける。音声に関する新たな発見と気づきを得る上で、意義深い学びの機会となったことは明白である。

今回の調査の対象者は大学生であるが、「英語の音声や音声規則について、もっと早く学んでおきたかった」という意見は極めて多かった。音声教育に関して、筆者は、音声に敏感な時期である英語学習初期の早期段階から継続的に行うことが最も望ましいと考えているが、小学校段階で効果的な音声教育が現実的に可能か否かについては、先の議論でも述べたとおり、課題も多いのが現状である。解決策の一つとして、良質で実用的な音声指導用教材や視聴覚教材の開発、ならびに指導者養成に向けた対策の検討が急がれる。一例として、近年、開発と実用が始まったばかりの電子黒板を利用した音声教材の研究・開発が進むことによって、学校教育における音声指導の質的向上に大きく貢献できるものと思われる。

(2) 音声教育の重要性について

【音声教育の重要性】

- ・ 英語音声学の授業を通じて、英語の発音やリズムがいかに大切かということを学んだ。
- ・ 調音点や調音方法について学び、実際にそれらを使って発音してみると、これまで自分が発したことのない英語の音声が出せることに気づいた。リズムやイントネーションも大切だということが分かった。
- ・ 音の違いを知ることによって、話す時だけでなく、聴く時にも単語の聴き分けができるようになった。
- ・ なるほどと思う事が沢山あった。英語に対して難しいイメージがあったが、英語音声学は分かりやすく楽しかった。
- ・ 英語の発音の仕組みが分かった。
- ・ この授業を通して、英語の子音は口内のどの部分を使って発すればきれいな音になるのかを学ぶことができた。
- ・ かなり面白かったです。最初はわけも分からずに受講しましたが、かなり役に立つ内容でした。

- ・文を読む際に強弱をつけるだけで、ここまできれいに聞こえるとは思わなかったので感動した。機能語や内容語について等、とても役立つ学びが多々あった。英語に対する関心がさらに高まったと思う。
- ・英語で会話する時、リズムや強弱を付けて話すことが大切だと学んだ。

【音声・音声認識力の重要性】

- ・walk と work を同じ音で発音してしまうと意味が異なって伝わってしまうので、しっかり発音できるためにも音声について学ぶことは大切だと思う。
- ・発音が少し変わるだけで単語の意味が変わってしまうため、発音が大切なのだと英語音声学を通じて学ぶことができた。
- ・講義を受ける以前は、発音には似たような音があると思っていたが、授業を受けてからは、微妙に発音が違っているということが分かった。似たような音でも、少しずつ全ての発音が違っているということが分かって、英語の聞き取りの際には注意するようになった。
- ・似たような発音であっても、IPA⁽⁷⁾の表記が異なっていれば音も異なるということなど、発見すべき点が多くあった。話している時も聴いている時も単語の音の違いを知らないで正しく認識できずに困ることになる。

【音声的側面の多様性】

- ・英語のリズムには、単語や文中の強弱がとても重要であることを学んだ。
- ・英語音声学の講義を通じて、IPA、英語独特のリズムの取り方、イントネーションやポーズなど全て含んだ発音の仕方を学び、そのいずれもが重要であることを実感した。
- ・あいまい音などの弱母音があることを知った。聴き取る際に聴き取れなかったのは、母音の弱母音化によるものであった。
- ・この講義を受けて、「a」にも色々な発音があるということを初めて知った。
- ・仕組みを理解してから発音し、練習するという手順で学習を行った。
- ・英語音声学を通じて、日本語と英語の発音の相違や英語の発音の仕組みについて論理的かつ体験的に学習した。

単語や文中の強弱は、英語のリズム形成やメッセージの伝達において重要な役割を果たしている。例えば、内容語か機能語の違いに対して強弱を付けることによって、英文のリズムは格段に良くなり、文のメッセージも伝わりやすくなる。このように、英語の音声教育を行う場合、母音や子音の調音方法や音声の違いを学ぶことはもちろん重要であるが、単音の指導だけでは決して充分とは言えない。リズムやイントネーション、連音や脱落、同化等による音の変化を含むプロソディーについても同時に学ぶことが不可欠である。また、日本語の音声的特徴の影響を受け、日本人英語学習者は英単語に含まれる全ての母音を一つひとつ丁寧に読んでしまったり、子音の後に母音を挿入してしまう傾向が強いため、例えば、McDonald [mækdʌnəld] を [ma ku do na ru do] とローマ字読みのように発音してしまうことがある。しかし、実際の英語の発音では母音が一箇所だけ強く読まれ、それ以外の母音はあいまい音として弱母音化する。学習者は、弱母音 /ə/ が英語の音声リズム形成において重要な役割を担っていることについても学び知っておく必要がある。渡辺・大坂(2002)は、英語の音声教育において、個々の音よりもリズムやイントネーションの学習の方が、一層重要であるとの認識を示しており (p.1)、強弱の使用が、発話の速度、文のリズム、文強勢と密接な関係を持っていることについて述べた上で、弱形の指導がなされていないことから生じる弊害は大きく、できるだけ早い時期から習熟の必要があると説いている (p.50)。「あいまい音などの弱母音があることを知った。聴き取る際に聴き取れなかったのは、母音の弱母音化によるものであった」という学習者の気づきは、今後の英語の聴覚および発話の両面において重要な音声認識の一つとして、大いに活かされるものと思われる。

また、「walk と work を同じ音で発音してしまうと意味が異なって伝わってしまう」、「発音が少し変わるだけで単語の意味が変わってしまう」、「似たような音でも、少しずつ全ての発音が違っているということが分かって、英語の聞き取りの際には注意するようになった」等の感想に見られるように、英語の意志伝達においては単音の違いを識別する能力が、「話す」・「聞く」両面にお

いて重要な鍵となる。これまで「似たような音」として場合によっては同じ音として分類されていた音声が、「異なる音」として認識されるようになったことは特筆すべき点であり、このような認識の深まりは、今後の英語音声コミュニケーションにおいて学習者に必ずや有益に働くものと思われる。

(3) IPA・発音記号の有用性について

【IPA や発音記号の有用性】

- ・IPA を学ぶことで独学がしやすくなったと感じた。例えば単語帳などを見ても、CD を聴くまで発音が分からなかったが、音声学を学んだことにより、発音記号を見て自分で発音できるようになった。
- ・英語音声学の授業を受けるまで、英語の辞書にある発音記号の一つひとつに個々の音があることを知らなかった。どこかの国の記号なのか、何のために書いてあるのか分からなかった。しかし、この講義でその意味が分かった。IPA は単語の音を知るために必要なものであることがわかった。これから単語を辞書で調べた時には、単語の意味だけでなく発音記号やアクセントの位置もよく確認して、発音と一緒に学んでいきたいと思う。
- ・教科書や辞書等の英単語の下に書いてある記号が、IPA という国際的な音声記号であるということを学んだ。また、それらを正しく発音するためには、正しい調音点と調音方法で音を出すことが重要であることを学んだ。この授業で学んだことを、英会話や英文を読む時にも普段から気を付けて行きたいと思う。
- ・中学や高校の教科書に出てくる単語の下に記号が何なのかが分かった。発音記号はとても大事なものであると今は感じている。
- ・IPA を学ぶことで英語の音がわかるようになり、英単語が覚えやすくなった。
- ・辞書で引いてみても単語の読み方が分からずに困ったことがあったので、英語を学ぶもっと早い段階で知っておきたかったと思うことが多々あった。
- ・今まで発音記号の意味や大切さを知らなかったが、英語音声学の授業を受け

でその意味と大切さがわかるようになった。

- ・辞書に書いてある発音記号が気になっていたのもとても良い勉強になった。
- ・IPA や発音記号を見て発音することができるようになったので、単語帳などを見ても英単語が覚えやすくなった。
- ・IPA を見て、単語の発音を判断することができるようになった。これからは、読み方が分からない単語があったら、先ず発音記号を見て一度自分で読んでみようと思う。その上で、電子辞書の音声機能を再生することで、単語の発音を確かめることで良い勉強になると思う。
- ・今まで辞書を見て、音声記号の存在は知っていても、読み方を知らないために活用できていなかったが、今回音声学を学んだことで、知らない単語の音がわかるようになってうれしい。

音声に関する学習は、独学が難しいと一般に言われている。CD や聴覚教材、あるいは教師などの音声を発する何らかの聴覚的手段を伴わない場合、その言語の音声について独学することは極めて困難となる。このような場合においても有効な手段となり得るのが、IPA (International Phonetic Alphabet: 国際音声記号) や発音記号である。IPA や発音記号のそれぞれが表している音や付随する記号の意味を学ぶことによって、音声を伴う聴覚的手段がない場合においても学習者は独力で音声を確認し、発することが可能となる。今回の調査では、このような IPA や発音記号の有用性に気づいた学習者も多く、「辞書で引いてみても単語の読み方が分からずに困ったことがあった」、「IPA を学ぶことで英語の音がわかるようになり、英単語が覚えやすくなった」という意見にあるように、これまで、IPA や発音記号がどのような音を表しているのかについて学んでいなかったため、記号を見ても音声がわからず、単語の下に発音が表記されていても、有意な意味を成していなかったことが明らかとなった。

「IPA は単語の音を知るために必要なものであることがわかった。これから単語を辞書で調べた時には、単語の意味だけでなく発音記号やアクセントの位置

もよく確認して、発音を一緒に学んでいきたいと思う」と述べた学習者の意見に見られるように、これまでは単語の「綴り」と「意味」だけを覚えていた学習から、単語の「綴り」と「音声 (アクセントを含む)」と「意味」を三つセットで覚えていくことの大切さを学んだことがわかる。英単語の学習では、「綴り」・「音声 (アクセントを含む)」・「意味および概念」・「用法」の四つ全てを一体として学んでおくことが、実際の運用面においては最も効果的である。綴りと意味だけを知っていても、音声がわからなければリスニングやスピーキングにおける活用が上手くいかず、円滑なコミュニケーションは図れない。学習指導要領の中では、中学校段階から「音声指導の補助として、必要に応じて発音記号を用いて指導することもできる (2-3-(1)-ウ, 2008: 72)」と明記されている。しかし、英語学習のどの段階において、どのように発音記号の指導を行うことが望ましいかについては言及されておらず、指導者の裁量に任されているのが現状である。これについて筆者は、音声教育を行う時期は英語学習の早期段階から適切な指導者のもとで行われることが望ましいと考えているが、これは必ずしも、この時期に発音記号の指導も同時に行うことが望ましいということではないため、留意が必要である。アルファベットと発音記号との混乱を避けるためにも、英語学習初期段階では「音声」に一層の重点を置いた指導が求められるであろう。また、発音と綴り字との関係にも焦点をあてた学習についても優先されるべき内容であると思われる。したがって、特に初等・中等教育段階に英語の音声教育を行う指導者は、学習者の理解度や学習段階等を十分に考慮した上で、いつ、どのように発音記号の指導を導入するか否かについて、慎重に検討する必要がある。

(4) 音声への「気づき」から「自信」へ

【音声や発音への意識の高揚】

- ・英語音声学を学んだことで、発音する時の意識が変わった。発音を今までに
なく意識するようになった。

- ・英語を発音してみることが楽しく思えるようになった。
- ・英語音声学を学んで、日頃から英語の発音を意識するようになった。
- ・英語音声学を学ぶまでは、発音や音の種類や違いに全く興味がなく意識していなかったが、この講義を受けて、音の種類や違いについてわかるようになり、興味を持って学ぶようになった。
- ・今まで意識していなかった単語の細かい発音の違いを意識するようになった。
- ・英語を発音するときの意識が変わった。スペルが違う単語でも同じか似たような発音であれば区別せずに同じ音で発音していたが、微妙な発音の違いが大きな意味の違いに繋がることが分かったので、これからはその違いに気を付けたいと思う。

【英語を発音する楽しさ・英語学習意欲の向上】

- ・とても勉強になった。英語の発音が今まで以上に上手になり、英語を話すことに魅力を感じ始めた。もっと授業を受けたいと思う。
- ・今まで発音が上手くできないことが理由で、授業中に当てられたら嫌だという気持ちがあったが、今は話してみたいと思う気持ちが少しずつ湧いてきた。

【発音への自信】

- ・英語を発音する時、いつもこの発音で正しいのかと不安に思いながら、自信を持ってないまま発音したり、聞き取ったりしていた。今回この講義を受けて、正しい発音方法やリズムの取り方などを学んだことで、少しずつ発音に自信が持てるようになった。また、いつも辞書を見ても、IPAを知らなかったため、どんな発音の単語なのか確認することができずにもやもやしていたのが解消できた。今後は、単語の発音も確認して、自信を持って発音したいと思う。
- ・英語音声学を学んで、英会話などで以前よりも自信を持って発音できるようになった。
- ・音声学できちんとした英語の音を学ぶことで、日本人の弱点である発音が改善され、自信につながると思う。
- ・ネイティブの発音を聴いて何となく発音を真似ていたが、英語音声学の講義

を受講して理論的に発音について学んだので、自信を持って発音できるようになった。

音声教育を通じて、多くの学生に最も顕著であったのが、音声への「気づき」から「興味、意識の高揚」へ、さらに「学習意欲の向上」から「学ぶ楽しさ」へと正方向に広がり、最終的には自身の中での「自信」形成へと至っている点である。英語の音声規則や音声的特徴を「知りたい」と欲しており、「知る」ことによって自身の中にさまざまな「気づき」が生まれ、「わかる」ことによって「興味や意識が高まり」、学んだ知識を日頃の英語学習で「日常的に使用してみる」ことによって、体験的に「不安や迷い」は「自信と確信」へと変わっていった様子が窺える。

「英語を発音してみることが楽しく思えるようになった」、「日頃から英語の発音を意識するようになった」、「話してみたいと思う気持ちが少しずつ湧いてきた」等の意見に代表されるように、英語の音声に関して基本的な知識を学び理解を深めたことによって、これまで苦手意識を持っていた音声の産出に興味を抱くようになった学生が顕著に増大した。また、「いつもこの発音で正しいのかと不安に思いながら、自信を持てないまま発音したり、聞き取ったりしていた」という学生が、「正しい発音方法やリズムの取り方などを学んだことで、少しずつ発音に自信が持てるようになった」という積極的な感想を述べており、知識や経験不足から生じる音声産出への「不安感や迷い」が音声教育を通じて「前向きな自信」へと変化していく成長の様子は、何よりもの喜びであった。

以上のように、英語教育における音声指導は、学習者自らが自信を持って英語学習や英語コミュニケーションに取り組んでいく上で、必要不可欠な学習要素の一つであると言える。

5 考察

英語の音声教育は、単音のみならず音変化やプロソディーの指導も併せて行うことが不可欠である。具体的には、母音や子音の音声や調音方法、子音の連続、母音の弱母音化、連音・同化・脱落、内容語・機能語による強弱、語や文の強勢、句読法、リズムやイントネーション等の様々な音声的側面に関する知識や理解を深め、さらに体得的に習得を促すためには日頃の英語教育の中でも継続的に指導を行っていく必要がある。

調査結果について考察すると、質問項目1と質問項目2の結果からは、93.0%という高い割合の学習者が中学校および高等学校の英語授業において発音指導が充分に行われなかったと回答しており（表1・表2参照）、これは、筆者が本研究に先立って実施した太田（2012）の結果と等しく、中学校・高等学校における音声教育が満足に行われていない極めて深刻な現状を明らかにする結果となった。

質問項目3の調査では、中学校や高等学校の英語教育においてアクセントやイントネーションの指導は行われているものの、それ以外の音声的側面（子音、母音、綴りと発音の関係、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声やリズムの違い等）に関する指導については充分に行き届いていない現状が確認された（表3参照）。

質問項目4については、walk-work や father-farther-further 等の例を挙げてすでに論じたように、音声識別に困難を感じている学習者が顕著に多いことがわかった。その原因は、実際には異なる音であるにもかかわらず、類似している音を同じ音として認識してしまう傾向が強く見られたところにある。日本語には母音が五つしか存在しないが、英語には複数存在する⁽⁸⁾ため、英語の母音の区別があいまいな学習者は似ていると判断した母音を同じ母音として認識し、代用してしまう傾向が考えられる。また、調音点や調音方法が微妙に異なるだけで、音や単語の意味が異なるということは英語では一般的に起こり

得る現象であるが、これらの音を区別して発音や聴き取りできるかどうかということよりも先ず、英語にはこのような音声的区別が存在しているということについて認識していない学習者も多く見受けられたため、これらの知識についても教授しておくことが肝要である。

調査結果を総括すると、調査対象者の多くがこれまでの英語学習において英語音声の豊かさや日本語との音声的相違について学習する機会が極めて少なかったということが明白になった。本研究の結果を真摯に受け止め、日常の英語教育における音声の取り扱いの重要性について、指導者と学習者が共に認識を深め、意識的に取り組んでいくことが第一に必要である。

「IPA は一度学ぶと一生役立つと思う」という学習者の意見にも示されているように、一度あるいは集中的に時間を確保して指導した音声知識が、その後の英語学習において持続的に活用可能な場合も多い。音声規則や発音記号もこのような日常的に継続的利用が可能な知識であると思われるが、全く知らない学習者と知っている学習者とは、その後の英語学習における習熟や理解度に大きな差が生じることも考えられるため、英語教育において音声指導を怠ってはならない。英語と日本語の音声規則や音韻構造の違いについては、「英語の文法規則に関する違いを教えるように、必ず行われなければならない指導である（太田, 2012: 69)」。したがって、実用面においても必要不可欠な音声規則に関する知識は英語学習者に必須の指導内容の一つであり、授業等を通じた実際の運用の中で体得されていく必要がある。音声教育の有用性については、先ず指導者自身が認識を深め、学習者への指導を恒常的に行っていくことが強く望まれる。

また、日本語と英語の音声規則の特徴を適宜比較しながら学習者に提示することによって、英語の音声的特徴についての理解を更に深める有効な手段となり得ることから、英語の音声教育に携わる者は、日本語と英語の両言語に関する基本的な音声知識を有していることが求められる。英語を指導する立場にある者が「英語音声についての知識を持ち合わせない」、「何を、どのように教え

れば良いのかわからない」というのでは、教壇に立つ者としての資質が問われかねない。音声学者になるわけではないので、基本的な音声入門書と付属の音声 CD などを活用しつつ、英語の単音やプロソディーに関する基礎知識を修得しておく必要があるだろう。同時に、音声指導技術を向上させるための研修会やプログラム等を充実させ、指導者が実践力を身に付け、指導に活かせる知識や技能の修得を支援する仕組みの整備も欠かせない。日頃の英語教育の中で、日常的かつ持続的に音声教育が行われる授業の実践が求められる。

「いつもこの発音で正しいのかと不安に思いながら、自信を持ってないまま発音したり、聞き取ったりしていた」という感想からは、音声に対する学習者の葛藤と不安がひしひしと伝わってくる。このような学習者の多くは、おそらく英語の音声やリズムのモデルが体得的に備わっていないため、自身の中に音声的模範とすべく音声モデルが内在しておらず、さらには、発音記号についても学習していないため、単語の発音を確認することが難しい状況に置かれ、その結果、発話の際は常に音声に関する不安や迷いを感じている状態にあることが推察される。このような不安な思いを一刻も早く払拭し、自らの力で理解する技能を身に付けるためにも、英語学習の早期段階から適切な音声教育を継続的に実践することが必要不可欠である。

おわりに

英語教育における「音声」や「発音」というと、とかくミクロ的な視点であると捉えられがちであるが、本稿の議論はその域に止まらない。国際共通語として英語がグローバル化する現代において、学校教育における英語の音声教育をどのように行っていくことが望ましいか、について教育学的視点から考察した。Jenkins (2007) らによる共通語としてのコア (Lingua Franca Core) の研究が進む中、学校教育課程における英語教育という基軸に立って、音声教育の在り方を検討することは意義深い。

調査の結果、中学校や高等学校において音声教育が充分に行われていない深刻な現状が明らかとなり、加えて、多岐に亘る音声的側面（子音、母音、綴りと発音の関係、連結・連音、同化、脱落、アクセント、リズム、イントネーション、日本語と英語の音声やリズムの違い等）の指導内容についても、調和的な音声指導の在り方に乏しい実態が顕在化した。音声は、コミュニケーションにおいて極めて重要な役割を果していることから、音声教育の重要性は明らかであるが、その指導内容については、単音のみならず音変化やプロソディーの指導も併せて行うことが肝要である。指導者と学習者が共に音声教育の有用性について認識し、日頃の英語教育において持続的かつ継続的に音声教育を行いながら体系的に音声習得を促すことが望ましい。

例えば、一度自転車に乗れるようになった子供が、数日後に急に乗れなくなるといことがないのと同様に、一度発音できるようになった音声や体得したリズムが、急にできなくなるということも通常は起こり得ない。すなわち、体系的に一端身に付けた音声や音韻感覚は、そう簡単に失われるものではないということを、筆者はこれまでの英語教育における音声指導を通じて経験的に感じている。したがって、英語学習初期に音声指導を行う者はこれを理解した上で、場合によっては「一生涯の贈り物」になるかもしれない英語音声の素地をしっかりと子供たちの中に築き上げていきたいものである。われわれ英語教育に携わる者は、その重要な役割を担っているのである。

すでに述べたように、本稿の調査で最も顕著であったのは、学習者の多くにつき、英語音声に関する教育が質的にも量的にも極めて少ないという問題点である。その要因は複数考えられるが、まずは英語教育界における音声指導の重要性に関する認識と意識の希薄さが挙げられる。さらには、英語科教員養成課程における音声教育（知識および指導技術養成）の不足、指導者側の英語音声に関する知識および指導技術不足、良質で実用的な音声指導用教材や視聴覚教材不足等が考えられる。これらの問題に対する抜本的な対策および取り組みは急務であり、さもなくば、わが国の今後の英語教育に大きな影を落としかねな

いと筆者は危惧している。

今後は、これらの課題への対応策を具体化していくと同時に、学校教育における音声教育が、教育課程においてどのように導入され、どのように発展的に指導および展開していくことが望ましいのかについても、更なる研究を深めていくことが求められる。

表一覧

表1 中学校で発音指導をどのくらい受けましたか？

表2 高校で発音指導をどのくらい受けましたか？

表3 中学校および高等学校の英語授業における具体的な音声指導内容（子音、母音、綴りと発音の関係、アクセント、イントネーション、連結・連音、同化、脱落、リズム、日本語と英語の音声やリズムの違い）について

表4 heart（心）と heard（聞く hear の過去形）の発音について

参考文献

太田かおり（2012）「日本の英語科教育における音声指導の現状－初期英語教育における音声指導の導入及びその指導法の確立を目指して－」『九州国際大学社会文化研究所紀要』69, 53-73.

大谷 泰照（2009）「学習指導要領が映すこの国の姿（特集 新学習指導要領－英語教育は変わるか）」『英語教育』58(2), 34-37.

大津由紀雄（2006）『日本の英語教育に必要なこと』慶応義塾大学出版.

大津由紀雄（2007）『英語学習7つの誤解』NHK 出版.

大津由紀雄、鳥飼玖美子（2009）『小学校でなぜ英語？』岩波書店.

金森強（2012）「小学校外国語活動に求められるものは何か」『英語教育』60(11), 10-12.

小嶋英夫、尾関直子、廣森友人（2010）『成長する英語学習者－学習者要因と自律学習－』英語教育学大系 第6巻，大修館書店.

竹林滋、斎藤弘子（2009）『英語音声学入門』大修館書店.

見上晃、西堀ゆり、中野美知子（2011）『英語教育におけるメディア利用－CALL から NBLT まで－』英語教育学大系 第12巻，大修館書店.

文部省調査局（1958）『中学校学習指導要領 昭和33年改訂版』帝国地方行政学会.

文部省〔現 文部科学省〕（1977）『中学校学習指導要領 昭和52年改訂版』明治図書出版.

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 外国語編 平成20年9月』開隆堂出版.

- 文部科学省 (2010) 『小学校学習指導要領解説 外国語編 平成 20 年改訂版』東洋館出版．
- 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 平成 21 年 5 月』開隆堂出版．
- 『読売新聞』2012 年 6 月 23 日朝刊「教育ルネサンス」．
- 渡辺和幸、大坂四郎 (2002) 『リズム中心の英語発音』鷹書房弓プレス．
- Jenkins, J. (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.

〈注〉

- (1) 筆者は大学生対象の「英語音声教育に関するアンケート調査」を 2010 年度にも実施しており、太田 (2012) に調査結果を報告している。結果の詳細については、太田 (2012) を参照されたい。今回の調査はこれに続く調査として実施した。質問項目 1 と 2 については、前回と共通の質問項目を用いて調査を実施し、それ以外の項目 (質問項目 3 と 4) については音声指導に関する具体的な指導内容の詳細を調査することが目的であるため、新規追加項目として新たな質問項目を設定し、調査を実施した。
- (2) 敏感期仮説 (Sensitive Period Hypothesis) とは、一定の年齢までに適切な学習が行われなければ、年齢要因の影響により発音などの到達が難しくなる、という仮説 (小嶋他, 2010)。
- (3) 当該授業「英語音声学」は留学生も多く受講しているが、今回の論文の主旨は日本の中学校・高等学校における英語音声教育の実態を明らかにすることが目的であるため、日本人大学生を調査対象者に限定して結果の集約を行った。
- (4) 調査の質問項目 1 と質問項目 2 については、前回と同様の質問内容で調査を実施している。前回の調査結果の詳細については、太田 (2012) を参照されたい。なお、以降も継続して同アンケートについての調査を実施しており、母集団数を増やしつつ累積調査を行うことによって結果の一般化を図り信頼性を高めることが目的であるため、今回も新規対象者に調査を実施している。2010 年度に実施した調査対象者と今回の調査対象者は英語力や英語学習歴においてほぼ同一レベルであるが、新たな対象者に対してアンケート調査を実施しているため、母集団そのものが異なっていることに留意されたい。
- (5) 本稿の「調査内容」では、質問項目 3 に関連する 11 個の質問と、質問項目 4 に関連する 5 個の質問は、項目の概略のみを記載している。実際の質問紙では、各々の項目に対して細かな選択肢が付いており、その中から最も適切なものを選択する形式でアンケート調査を実施した。
- (6) 研究者によって英語の母音の数に関する見解は異なるが、「竹林・斎藤 (2009) , 英語音声学入門」によると、母音の数は 30 個 (短母音 6 個、長母音 5 個、二重母音 11 個、三重母音 3 個、弱母音 5 個) である。
- (7) IPA (International Phonetic Alphabet) は国際音声記号のことであり、世界中のあらゆる言語の音声を記号によって表記したもの。音声を記号化し、調音点と調音方法で

どのような音であるかを説明している。

- (8) 脚注(6)を参照のこと。本稿では、英語の母音の数については 30 個という見解を支持している。